

## 夏合宿(2日目) 北岳バットレス第3尾根 (2017/8/12)

メンバー：森田(L)、中嶋、小林、椿尾、池崎、崎間(記)

2016年8月の遭難事故検証のため松並さん・辻さんが辿ったであろうルートをトレースすること、お二人の慰霊を目的に北岳バットレス第3尾根へ行きました。彼らが生涯を終えたビバーク点まで辿り着くことはできなかったものの、第3尾根に迷い込んだ過程について情報を集める事が出来ました。今回得た情報を踏まえた教訓も併せて記します。

### ◆概要

- ・ 8/12(土) 5:30 白根御池小屋 → 7:00 D ガリー大滝取付 → 8:30 横断バンド → 9:00/9:30 C ガリー周辺を調査 → 9:30/13:00 第3尾根取付周辺を調査/追悼 → 14:00 D ガリー大滝取付 → 15:00 白根御池小屋

### ◆詳細

白根御池小屋から二股経由で大樺沢の急登を登る。悪天予報だったが6:00時点では快晴。バットレス沢、C沢と渡り、北岳バットレス下部岩壁への踏み跡に入る。お花畑の急登。Dガリー大滝の取付きで登攀準備。ぼくは北岳バットレスに来るのが今回初。今回は経験者と来たので楽だったが、初見メンバーだけだと下部岩壁まで辿り着くのも一苦労だと感じた。もしガスでバットレスが見通せなければなおさらだ。

「中嶋さん・小林さん」「椿尾さん・崎間」「森田さん・池崎さん」の順にDガリー大滝を登り横断バンドを目指す。岩がスベスベで1ピッチ目の出だしがやや悪い。中間支点として残置ハーケンが所々打ってある。ビレイ支点もハーケン。2ピッチで横断バンドの草付広場へ。横断バンドは念のためロープを出してトラバースする。錆びたリングボルトにスリングとハーケン(抜けたのだろう)がぶら下がっている。横断バンドの途中から第4四尾根の取付きへ行けるようだがよく分からない。途中からコンテにして横断バンドをCガリーまで抜ける(写真3)。

ここまで、辻さんの遺した写真と、現場の地形やビレイ支点を照合しながら進んで来たが、はっきり現物確認できたのはDガリー取付きの部分と、横断バンドのトラバース部に垂れ下がっていたスリングのみ。Cガリーを詰めた先には第3尾根が見える。1年前、彼らはどういう経緯で第3尾根へ取付いてしまったのだろうか。いつの間にか青空は消え、雲が厚くなっている。

彼らの行動を想像しながら、Cガリーを詰めて第3尾根へ向かう。cガリーは酷いガレで、足場を崩さず進むには非常な緊張を要する。途中、「4オネ→」とペンキで書かれた岩あり(写真4)。この矢印が微妙で、その向きに忠実に従うと、第3尾根の末端に着いてしまう。本来の第4尾根の取付きは、ペンキの岩を真上に30m程進んだ所にあるcガリー右岸の凹角状のスラブ(ヒドンスラブ)を登った先にある。



写真1 Dガリー大滝1ピッチ目



写真2 横断バンド

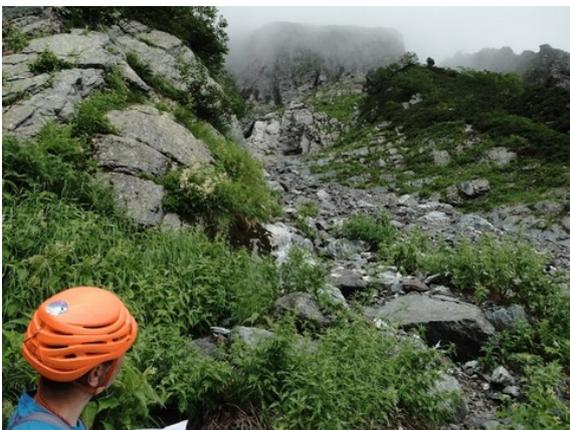


写真3 横断バンドからCガリー



写真4 Cガリー。左下にペンキの岩

第3尾根の様子を伺うため、向かって右側の急な草付を小林さんがリードするも悪そう(写真5)。正面にチムニーがあるので、上部に行ってみようとぼくのリードで取付く。チムニー抜け口が少々悪いのでカムで支点をとって乗越す。出た先には支点が見当たらなかったのも、ハーケン2枚でビレイ支点を設置。が、よく見ると5m程右上にボロボロのビレイ支点があった。登られた形跡はありそう。続いて、椿尾さんリードでもう1ピッチ伸ばす(写真6)。ガレガレでロープがすれるたびに落石が起きる。残置支点なし。30m伸ばした所で、やはりハーケンを支点をつくりピッチを切る。このような所を、ハーケンもハンマーも持っていなかった松並・辻パーティーが登った可能性は低いと考え、降りることにする。幸いにも、ボロいものの残置ビレイ支点を発見。スリングが怪しかったので椿尾さんの捨て縄で補強して懸垂下降。小林さん・中嶋さんも一旦草付上まで行ったものの、やはり下降。



写真5 第3尾根下部草付き



写真6 第3尾根下部2ピッチ目

第3尾根基部をCガリー側へ回り込むと、辻さんの写真にあった残置支点を発見した(写真7)。この辺りから第3尾根に取付いた可能性が高い。中嶋さん・小林さんがcガリー側のルンゼを偵察に行き、残り4人は待機。残置支点のある右のフェイスや正面のフェイスを松並さんらが登った可能性を考えたものの、結構悪そうだし残置支点もないため、その可能性は低そう。そうこうしている内に、中嶋さんから無線の連絡が入る。ビレイ支点は貧弱だし辻さんの写真と様子も異なるため、どうやらこのルートでもなさそうだとの事。中嶋さん・小林さんが懸垂下降で戻ってきて、再び第3尾根基部に集結。一体当時の彼らはどこを登ったのだろう。八方塞がりだ。

時刻は13時になろうとしている。ここからさらに取付きを探し、3ピッチ程度登ってビバーク点まで行けば、ビバーク点に着いた時点で日が暮れてしまうだろう。帰りのことを考慮して、第3尾根基部でお花・線香・写真・お供え物を捧げ、メンバー全員で黙祷。お二人のご冥福を祈る(写真8、9)。お花、線香、お酒の中身以外は、ゴミにならないよう回収する。

下山時、Dガリー大滝を懸垂下降中に雨が降り出す。白根御池小屋のテン場に戻ったのは15:00。テントに戻り、もう一度当時の写真と今日の状況を照らし合わせると、第3尾根基部の残置支点から直登するライン辿っていたようだ。現場でぼくらが「ここは悪すぎて登らないだろう」と判断した垂壁(写真10)を、1年前の彼らは果敢に登っていた。



写真7 第3尾根下部の残置支点



写真8 お供え



写真9 黙祷



写真10 右側が第3尾根下部の垂壁

◆検証

8/12 時点で得られた情報は上述のとおり。さらに、翌 8/13 に第 4 尾根を登った中嶋さん・池崎さん、下部フランケ～D ガリー奥壁を目指した小林さん・椿尾さん・きなこさんの目撃情報を総合すると、松並さん・辻さんが 2016 年 8 月に辿った記録として事実が確認できた情報は表 1 のとおり。ここで、時間は辻さんの写真データによる。また、図 1 及び 2 に概念図を示す。

表 1 松並さん・辻さんが 2016 年 8 月に辿った記録

日	時刻	場所	特記事項
2016/8/26	08:58	北沢峠	
	10:37	広河原	
	14:05	二股	
2016/8/27	05:39	二股	
	07:22	第 5 尾根支稜取付	
	08:36	第 5 尾根支稜 2P 目終了点	
	09:19	D ガリー 2P 目	捨てられていたアプローチシューズの場所から特定
	09:38	横断バンド	横断バンド途中で第 4 尾根 1P 目に登りかけ、再び横断バンドへ降りている
	10:17	第 3 尾根取付	ここ以上は登らず、雨が強くなったため二股のテントへ引き返している
	12:21	二俣	
2016/8/28	06:50	二股	
	07:58	第 5 尾根支稜取付	
	09:32	横断バンド	
	10:27	第 3 尾根登攀開始	第 4 尾根取付きへのヒドンスラブと間違えて登攀か
	11:21	1P 目終了点	残置支点あり
	12:14	2P 目終了点	ピナクルで終了点設置
	12:59	3P 目終了点	
	13:38	4P 目終了点	ピナクルで終了点設置
	16:13	2900m 地点	雨。以降写真なし

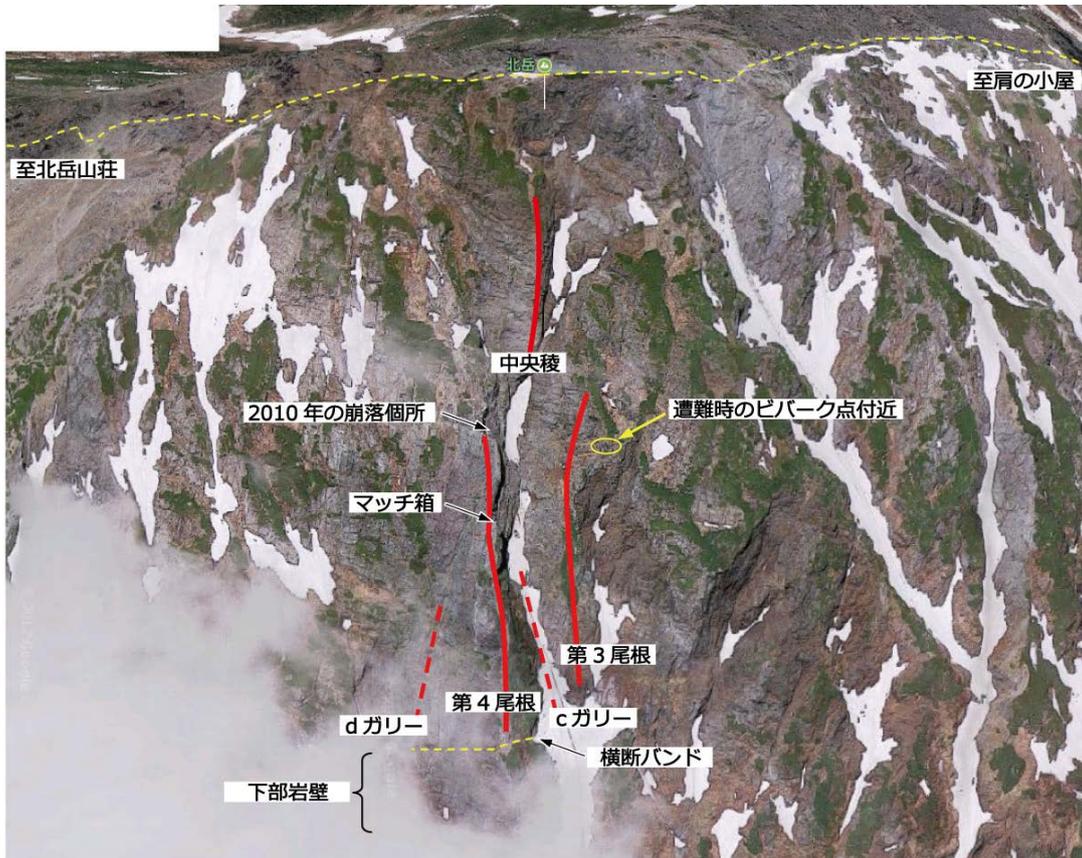


図1 北岳バットレス全景(航空写真出展：Google map)



図2 松並・辻パーティーの辿ったルート(概念図出展：新版日本の岩場)

#### ◆感想

2016/8/28 午前、悪天が迫る中、第3尾根基部のあの壁を登るのは、一体どれ程の労力だっただろう。彼らはハーケンを持っていなかった。カムは持っていたがまともにクラックをリードした経験はほとんどない。そんな状況で彼らは登って行った。気象データによると、当時の第3尾根基部ではまだ雨は降っていなかった。だが台風が迫っている事は知っていたはず。山頂まで素早く抜ける事が安全に繋がると判断したのだろうか。

第3尾根のルート状況は、残念ながら今回トレースできなかつたため分からない。基部の状況から類推すると、少なく頼りない支点で、ガラガラと崩れやすい岩場を登らざるを得なかつたと想像される。午後になると雨が降り出し、濡れた身体に風が吹き付け体温を奪われただろう。凍える体に鞭打ち渾身の力で登り切ろうとしたに違いない。ビバーク点に着いた時点での疲労度はどれ程だったか。厳しいクライミングでやっと抜けた岩場、ガレて安定しない岩、頼りないビレイ支点を振り返ると、懸垂下降で同ルートを下降するという選択肢は無くなってしまったのかもしれない。一つ確かなのは、彼らはぼくの想像した以上に困難なルートをあきらめずに登り、2日間風雨にさらされ飢餓に耐えながら救援を待ち続けた事だ。

#### ◆教訓

- ・ 北岳バットレス第4尾根は取付きまでのアプローチが悪い上、アプローチ自体のルートファインディングが難しい(運よく先行パーティーがいてその後を追うだけなら問題ないかもしれないが)。初見のメンバーだけで行くのなら、入念な下調べと、相応の余裕を持ったアプローチ時間の見積り事が必要。
- ・ ルートファインディングのミスは誰にでも起こり得る。常に「このルートで正しいのだろうか」と考えながら登る。
- ・ 人気ルートなのに中間支点が少なすぎたり、ビレイ支点が古すぎたりすれば、間違ったルートを登っていることを疑う。
- ・ 「超えてしまうと戻れなくなるポイント」が存在する。場所であったり、時間であったり。計画時にそのようなポイントを考えておき、「何時までに何処に到達できなければ引返す」のような基準を決め、無事に下山することを優先する。
- ・ アルパインでは天候、落石、支点等に不確定要素が多いため、ルートに対して体力・登攀能力・装備のいずれも余裕を持つ。

文章：崎間(2017/8/28)